

第12回 バイオリソースセンター細胞材料検討委員会 議事要旨

日 時 平成25年3月1日(金) 14:00~16:30

場 所 富国生命ビル23階 理化学研究所 東京事務所 大会議室

出席者

(委員等) 中畑 龍俊 委員長、赤池 敏宏、今村 亨、許 南浩 各委員

(文部科学省) ライフサイエンス課 細野係長

(NBRP) 佐藤事務局長、平田局員

(事務局) 小幡センター長、阿部副センター長、中村室長、今泉研究推進部長、村上課長他

■ バイオリソースセンターの次期中期目標、計画について

- 理研バイオリソースセンター(理研BRC)は、研究の質を担保すると云った点で非常に大きな役割を果たしている。当該観点から理研BRCは絶対になくすことはできず、また、理研BRCなくして日本の研究は担保できないと思われる。他の時限の研究と異なり具体的な評価が出にくい点がある。5年後の見直しの際に、将来に向けたコンセプトと、新しいバイオリソースの在り方を今から考えておく必要がある。
- 理研BRC事業は我が国のライフサイエンスの基盤の非常に重要な事業の一つであり、国として唯一のセンターであることが理解されつつある。さらに、確固たるものにするためには、今まで以上に十分な情報発信が必要である。
- グリーンイノベーション、ライフイノベーションという大きな2本柱が国の方針になっている。ライフイノベーションの中で位置付けられる事業であることを強くアピールして頂くことが必要と思われる。上述を踏まえて、理研BRCの存続の意義というものを明確にしてはどうか。
- 理研BRCは、時限のセンターとなっているが、本質的には安定的な継続を担保されるべきセンターである。しかし、時限となっている以上、時期に応じて衣替えしないといけないと思われる。iPS細胞を前面に打ち出しライフイノベーションの中での重要性をアピールすべきと思われる。
- 平成25年度の理研BRCの予算は非常に厳しいようで、25年度の予算実績が次年度にも影響を与えることが懸念される。センターの安定的な運営という観点からも、25年度の予算の可能な限りの埋戻しを図るべきである。

■ 細胞材料開発室の平成24年度成果について

- 理研BRCから出される細胞は、品質が確かなものだということ。また、理研BRCから提供を受けた細胞でなければ、学会にも発表できないというところまで到達して欲しい。現在でも、理研BRCの評価というものが定まっていると思われるが、今まで以上に努力をして頂くということが非常に重要と思われる。
- 限られたキャパシティの中で、研究者コミュニティのニーズを勘案し、細胞材料の整備について優先順位を決めることが重要である。
- 細胞を利用した成果論文については、調査の充実化を図って頂き非常に数が増えている。このことにより、理研BRCの存在意義が客観的に認められると思われるが、さらに、細胞を利用した論文全体の中で、理研BRCの提供細胞のシェアがどの程度なのか確認されると良いと思う。

■細胞材料開発室の平成25年度計画について

- 予算確保の観点から、諸外国のセルバンク等はどうのように予算的対応を図っているか把握しておく必要があるように思われる。
- iPS細胞については社会的な注目度も高く期待を集めている。従って、理研BRCから提供することは重要であり、特に、疾患特異的iPS細胞のバンクについて理研BRCが担っていくことは意義深い。また、この点を強調して業務を行って欲しい。疾患特異的iPS細胞のバンクについて、文科省の疾患特異的iPS細胞関連プロジェクト等で何らかの予算措置が必要と思われる。バンクの充実度という観点から、寄託される細胞に対して理研BRCに予算措置がされていないことは片手落ちではないかと思う。

■提供手数料の改訂について

- 民間企業のセルバンクへの依存度はどの程度なのか。また、それに関して上昇傾向なのか把握する必要があると思われる。また、具体的な成果に繋がる可能性の多いユーザーであるのか把握した方が良いように思われる。

以上